

# 保健雑誌に見られる 1960 年代の へき地教育言説の転換

— 地域メディア『岩手の保健』のへき地語りの変容に注目して —

高井良 健 一

Exploring the Diversion of Discourses about Education in Remote Areas in 1960s:  
Focusing upon the transformation of the discourses in a local magazine,  
“Iwate no Hoken”

## Abstract

The purpose of this paper is to explore the diversion of discourses about education in remote areas in a unique local welfare magazine, “Iwate no Hoken”, in 1960s. “Iwate no Hoken” has been published since 1947 by National Health Insurance Organizations Federation in Iwate Prefecture. During 1950s and 1960s, Ryo Omura, a main editor of this magazine transmitted various voices of people who lived in remote areas in Iwate Prefecture. Omura used to be a substitute teacher in Iwate before World War II. With his effort, until early 1960s there were various kinds of articles about education in remote areas written by various people including school teachers who taught in remote school in Iwate Prefecture. However the number of articles of this type has decreased rapidly and school teachers’ discourses has largely disappeared since the late 1960s. The life of people in remote areas was drastically changed in 1960s because of high economy growth in Japan, especially in Iwate Prefecture. As a result of social change, the style of education in remote areas has become no different from the one in urban areas. It must be one of the reasons of the decrease of discourses about education in remote areas in “Iwate no Hoken” in 1960s. This means that people lost one of the important platforms for the discussion about their local public education. This case study shows one aspect to understand the context, the background, the process and the nature of neo-liberal education reform after 1990s.

## はじめに

1960年代はへき地教育<sup>1)</sup>に対する人々のまなざしが大きく変容した時代であった。1960年代のはじめ、教育の後進地として救済されるべきものとされたへき地は、1960年代のおわりには、むしろ都市よりも恵まれた教育環境として語られるようになった<sup>2)</sup>。そして、高度経済成長期に、山村、農村、漁村をはじめ、各地から人口が流入し、膨張した大都市における教育の質の問題が、新たな課題として焦点を当てられるようになった。

これは、1960年頃から大都市近郊で生じている多様な課題を社会科学習の中心に据えながら、「巨大都市周辺の町」、「公園をつくらせたせっちゃんのおばさんたち」といった斬新な教育実践を創出し、戦後日本の教育実践史の一翼を担った、東京都公立小学校教諭の若狭蔵之助らの活躍を支える歴史的、社会的文脈にもなっていた<sup>3)</sup>。実際に、1960年頃から住宅難や公害などの東京の子どもたちの生活の現実と向き合う学びを創出していた若狭蔵之助の教育実践が著作として相次いで刊行され、大きく脚光を浴びるようになったのは、1970年以降のことであった<sup>4)</sup>。

戦後日本教育史のエポックメイキングとなった教育実践を時系列に並べてみると、1951年の無着成恭の『山びこ学校』、1957年の東井義雄の『村を育てる学力』、1977年の若狭蔵之助の『生活のある学校』、1978年の鈴木正気の『川口港から外港へ』と、教育実践の舞台が、高度経済成長期を挟んで、へき地から都市部あるいはその近郊へと移行していることに気づかされる。

1950年代のへき地教育への注目、1970年代以降のへき地教育の遠景化、これらの時期に挟まれた、1960年代という時期は、へき地教育に対する人々のまなざしの転換点であったのではないだろうか。このような問題関心から1960年代のへき地教育をめぐる地域メディアにおける教育言説を検討するなかで、岩手県の国民健康保険団体連合会の刊行による地域メディア『岩手の保健』に注目した。

戦前に岩手で小学校の教師を経験し、戦後、沖縄の宮古島から岩手に復員した大牟羅良（本名：大村次則）は、古着行商人として岩手の山村、農村を歩きながら農家のいりり端で聞き取った村人たちの声に心を打たれたことを語っている。大牟羅は、その後、『岩手の保健』の編集者となり、村人たち自身がその生活を綴るのを励まし、支えることを自らのライフワークとした。『岩手の保健』は、地域で活動する保健婦たちに向けて、そこで生きる人々の現実を伝えることを目的とした雑誌であったが、その読者は、地域の保健婦、保健、医療関係者ととどまらず、山村、農村にて生活を営んでいる人々から岩手県内外の都市部に住む一般の人々にいたる広がりをもっていた<sup>5)</sup>。また、掲載された記事のカテゴリーも、狭義の「保健」ととどまらずに、社会、家族、教育といった広がりをもっていた。そして、何

よりも地域の人々の<sup>なま</sup>生の声を拾い上げ、地域で生きる生活者の目線に立った記事、投稿こそが、『岩手の保健』の最大の魅力であった。

本論文では、このユニークな地域メディア『岩手の保健』に掲載された記事、投稿ならびに子どもの作文に注目することによって、日本列島のなかでも、とりわけ多くのへき地を抱えていた北上山地を含む岩手の地域に生きる人々の声を収集した地域メディアが、1950年代後半から1970年代前半にかけて、へき地教育に関する編集者の語り、教師の語り、子どもの語り、読者の語りをどのように表象してきたのか、そして、これらの語りは時代とともにどのように変容してきたのか、そのような変容がもたらしたものは一体何であったのか、を明らかにすることを試みたい。

### (一) 1950年代後半のへき地教育に関する語り

戦前に代用教員を経験した大牟羅良は、その経歴もあり、子どもたちが綴る作文に深い関心をもっていた。大牟羅の初めての著書である『ものいわぬ農民』（岩波新書、1958）には、高度経済成長以前の岩手の農民たちの声とともに、同時代の岩手のへき地の子どもたちの声が生計綴方の作文を通して掲載されている。これらの作品においては、同じ屋根の下に暮らす子どもと親が、へき地の生活の厳しさ、そこから生じる貧しさという現実、それぞれの立場で向き合う姿が描写されており、深く読者の心に訴えかけてくる。

例えば、小学校6年生女子児童の「本代」という作文は、次のようなものであった。

「けさ おかあさんに  
「本代までもっていかねえでいたへ（の）で  
きょうもっていぐあ」  
といたら おかあさんが  
「きょうでなく あしたもっていくんだ  
いま 一銭も ぜにっこ ねえへ（の）でよ  
きょう 組合さいて  
豆うって あした もっていぐべすよなあ  
といた  
ろばたにいた お父さんは  
だまって下を むいていた  
私は「うん」といって  
かばんをもって 家をでた」（同書、156頁）

へき地で生きる家族が抱えている貧しさが、子ども、母、父の三者三様の立場において、描写された、せつない作文である。「だまって下を」むくしかなかった父の胸中、家族の事情を「うん」という一言ですべて呑み込んだ女子児童、日常的な現金の持ち合わせがなく、その日暮らしをせざるを得ない山の生活が、この短い文章に見事に表現されている。

このように、『ものいわぬ農民』は、へき地に生きる人々の生活の厳しさを、農民やその子どもたちの声を通して、ナラティブ（物語）として構成したものであり、発行とともに大きな反響を呼び、発行部数は 1970 年までに 17 刷約 16 万部に及んだという<sup>6)</sup>。敗戦による焦土の経験がまだ生々しいものであったこの時代、貧しさへの共感を土台として、中央、地方のさまざまなメディアを通して語られた物語が、人々のへき地、すなわち、山村、農村、漁村における生活の改善への関心を広げる契機となった。『ものいわぬ農民』や『岩手の保健』は、このように社会の啓蒙を目指した活字メディアであった。

さて、『ものいわぬ農民』刊行の前年にあたる 1957 年 5 月号の『岩手の保健』において、へき地学校にスポットライトをあてた特集記事が登場している。「山の分校に生きる教師と子供たち 奥山にも人間の子が育つ！」がそれである。これは編集部の前書きとへき地の分校の若い男性教師の手記、東京からの若い女性の来訪者を受け入れた別のへき地分校の男性教師の手記、東京から分校を訪ねてきた当の若い女性の手記の四本の論稿から構成されたものであった。1950 年代後半のへき地教育がどのように語られていたのかに注目して、『岩手の保健』に掲載された多様な視点からの語りを検討してみよう。

まず冒頭に位置する編集部の前書きは、次のように始まっている。

「あんな奥地にもと思われるような、北上山脈の山ひだの中に、細く炭焼く煙が立ち上がっているのをみかけます。人あるところ子供あり、子供あるところ学校があるのです。傾斜地を切開いた狭い校地に小さな校舎が…そして、けわしい山道を上り下りして、子供たちが学校めざして集まってきます。ある時は風に吹き飛ばされるように、ある時は雨にしょぼぬれて、又ある時は吹雪に泣きじゃくりながら…そうした子供たちを、親鳥が雛を育てるように、膚のぬくもりで子供を育てているのが、分校の先生方ではないでしょうか。」(p. 6)

へき地の学校を舞台として、そこで幾多の苦難に遭遇しながら学び続ける子どもたちと、これを救済すべく強い使命感を帯びて献身的な教育を行う教師、この図式こそ、1950 年代後半の『岩手の保健』のへき地教育の言説を特徴づけるものであった。

続いて、1956 年度の『岩手教育年報』から岩手県内の小学校 1173 校のうち 35.6% にあたる 392 校がへき地校であったことが伝えられる。ここには、県内 222 校の分校は、そのほとんどがへき地校であり、一人の教師が全校児童を教えている学校が 39 校、そして児童数 40

名以下の学校が107校に上り、当時の岩手県のへき地校数は、北海道、長崎県に次いで、全国3番目に位置づいていたと記載されている<sup>7)</sup>。

一通りのデータを紹介したあと、編集部の語りは、さらに、読者の心に訴えかける。

「県都、盛岡市にさえ僻地のある岩手県は、全県僻地にみちみちています。それだけに僻地の問題は岩手県の大きな問題だと言っていいと思います。東京の娘さんですら、僻地の子供たちのことに、深い愛情を抱かれていますのに、岩手の私たちが、僻地の子供たちの生活に、どれほどの関心を<sup>ママ</sup>示めて来たでしょうか？、僻地の子供も、岩手の子供であり、日本の子供であり、<sup>ひと</sup>人間の子供であることに何の<sup>ママ</sup>変わりがありましょう。」(p.7)

明治初期の啓蒙思想家の演説を彷彿とさせるような力強い呼びかけのあと、編集部の文章は、以下のようにしめくくられている。

「僻地は何時までも僻地であってはいけない—そのために<sup>ママ</sup>楽しみ少い山の分校で、数多くの先生方が、人知れぬ苦しい努力を、昨日、今日も、そして明日もつづけてゆくにちがいありません。僻地とは地理的に僻地であるばかりでなく、そこに住む人々の物の考え方が僻地的なところにも問題があるのではないのでしょうか。しかし、先生方の努力が、やがて新しい考え方を身につけた子供たちを育ててくれるにちがいありません。その時こそ僻地にも春が忍びやかに訪れてくるのではないのでしょうか。」(p.7)

編集部の言説は、へき地を啓蒙と救済の対象とし、へき地の人々の土着の思想を矯正の対象とするものであった。そのための伝道者として新しい教育への使命感を帯びた献身的な教師たちに期待がかけられた。読者たちもまた、この呼びかけに応えて、へき地の現状克服に関心をもち、心を配ることになった。このように、へき地の存在が地域メディアによって広く可視化されることによって、編集者も、教師も、読者も、同じ舞台上って、社会の変革に向けての言説を重ねる実践に参加できるようになった。1950年代後半の地域メディア『岩手の保健』において、へき地教育という論題は、編集者と読者が連帯して社会変革に踏み出すことを可能にする言説空間として機能していたといえる。

編集部の言説に続いて、「山の子等と三ヵ年」という山の分校に勤める27歳の男性教師である遠藤進也教諭の教育実践記録が掲載されている。この実践記録は、分校の子どもたちの生活綴り方の紹介から始まっている。冒頭で引用されているのが「もりつこ(子守)」というタイトルの小学校1年生女子児童の作文である。

「ともえ（妹）をもりっこしました。  
ともえがしょんべ（小便）たれました。  
わたしのけっつ（お尻）がしゃっこく（つめ  
たく）になりました。あっぱ（母ちゃん）に、  
「ともえしょんべたれだ」といったら、「だ  
まってしょってろ」といいました。  
わたしはそりにのせました。  
ともえはわらいました。」(p.7)

遠藤教諭は、この作文の向こうにある女子児童の生活について、次のように語る。

「やっと自分一人で便所に行けるようになった一年生は、もう妹の子守をしなければなりません。七つと五つと三つと一つの姉妹では、一時間余りもかかる学校から、それこそやっ  
と帰って来ても、自分だけ一人で遊ぶわけにはいかないのです。たとえ一年生でも仕事の一端を荷なわねばならないのですから…」(pp.7-8)

この女子児童の両親は、山での炭焼きを生業としていた。小学校一年生の児童には三人の妹たちがいて、家に帰るとすぐに子守の仕事が待っていた。妹が背中でお漏らしをしても、炭俵編みに追われる母にはその手助けをするいとまもない。児童は、妹をそりに乗せて、何とか濡れた背中から下ろした。すると、妹も楽になったのか、笑っている。貧しい生活のなかにも、何かしら不思議な明るさも感じられる作品である。ただ、遠藤教諭は、綴り方の表現のなかにある児童のしなやかなたくましさにはとくに言及することはなく、その啓蒙のまなざしは、真っ直ぐに児童の生活の厳しさに向かっている。

続いて、学校で「ひなまつりのうた」を歌っているときに、しらみにたかられた1年生の男子児童の作文が紹介される。こちらもしらみとおひなさまのコントラストの鮮やかさについて引き込まれるような作品であったが、遠藤教諭のコメントは一貫している。その後、ランプのない家でいろいろの火で本を読もうとしても目が疲れるばかりだから寝るしかないという5年生の男子児童の作文が紹介されたのち、5年生の女子児童の「ぜねつこ」という作文が紹介されている。

「学校から帰って、だだ（父）に  
「明日本買わねばねえ、二百四十三円だぞ  
あ（だそうだ）」といった。だだは  
「今ぜね（お金）ねえ」といった。

私はきまやげで（腹が立って）おこって言った、  
「へだって（そうだって）教科書だもの、  
明日かわねばねえ」といっても、  
だだはしらねえまねして水をくんでいた。」(p.9)

はじめに紹介した『ものいわぬ農民』所収の作文と重なる風景である。遠藤教諭は「「知らねえまね」をするただと、「きまやげる”子供の姿は、あまりにも痛々しい」(p.9)と自らの心情を語ったあと、「子供に教科書代を請求されて、返事ができない父親の悲哀は、「しらねえまね」をする教育的無関心になって現れるのです。自分の子供を可愛がらない父親はないにしても、ぎりぎりの生活では、いつもこのようにして子供の夢は破れてしまうのです。」(pp.9-10)とへき地の人々の貧困が子どもの未来を閉ざしていることを訴える。女子児童が怖じ気づくことなく、父親と渡り合っているところから、戦前から戦後の家族関係の変容を読み取ることもできるように思われるが、遠藤教諭のまなざしは、ここでも揺らぐことなく、真っ直ぐに児童の生活の貧しさに向かっている。

最後の作品は、六年生の男子児童の「たたみ」である。

「おら家にはたたみがないので  
むしろをしいている  
むしろはうすいので  
けつア下からしやっこくなる  
たたみは四角できれいだが  
おら家にはたたみがない  
おらもたたみの上でねてみたい」(p.10)

遠藤教諭は、「この部落ではたたみのない家の方が多いのです。ほとんどは、押入れみたいな奥ゆき一間、巾二間位の細長い部屋（ねどこ）にわらを敷きつめ、せんべいぶとんにくるまって一家頭をならべて寝るのです。」(p.10)と語る。戦後復興から取り残されたへき地の貧困、生活のための資源の欠如は、へき地の外部からやってきた若き男性教師の目に、直ちに救済されるべきものとして映し出されていた。

さらに、遠藤教諭は、へき地の貧困は、物質的な貧困にとどまるものではないと述べる。五人の1年生を迎えたこの分校には、自分の名前すらを知らない1年生もいた。そして、自分の子どもの名前をどうしても思い出せない父親もいた。普段「ぼんず」と呼んでいる上、出生届を提出した際にその名前は良くないと役場の人が言ったので、その人につけてもらっ

保健雑誌に見られる 1960 年代のへき地教育言説の転換

たため、覚えられないのである。

また、やけどを負っている子どもが全校の 1 割もおり、この原因の多くは囲炉裏<sup>いろり</sup>と大人の不注意によるものであった。ある日、受けもっていた男子児童の妹が大やけどをして、親がまだ病院に連れていっていないことを知り、「それは大変と」(p. 11) 家庭訪問をしたところ、泣き叫ぶ三歳の女兒を前に、父親はもう命が助からないかもしれないから医者<sup>いしや</sup>に連れていく必要はないと言う出来事があった。遠藤教諭が、衝撃のあまり「しばし声がでませんでした。」(p. 11) と語るように、へき地の教師が出会った山村に生きる子どもたちの生活の現実<sup>じゆんじつ</sup>は、想像を絶するものであった。この手記の最後を、遠藤教諭は、次のように締めくくっている。

「子供の詩や生活の中から僻地のなんたるものかを理解しようと思いました。僻地とは地理的な距離や地形だけではないのです。

交通不便なへだたりや地形が貧困にし無知にするのですけども、単に客観的な僻地の要素よりも、そこに住む人たちの内面的な僻地性、そんなものがあるような気がするのです。ものの考え方、受け取り方、またその処理のしかたこそ、教育の範囲ではないかと思われるように感ずるのです。」(p. 11)

岩手の北上山地の山あいの分校に通っていた 1950 年代後半のへき地の子どもたちとその親たちは、その地に赴任した若き教師の目に、貧困と悲惨のなかに取り残された救済と教育の対象として、映し出されていた。

続いて、県内へき地の分校に勤めていたもう一人の男性教師である菊地時雄教諭による「山の子供と東京の娘さん」という文章が掲載されている。菊地教諭は 1956 年の 8 月に教員養成所を修了してすぐに山の分校に着任した初任教師であった。着任とほぼ同時期に、当時東京大学教育学部助教授だった岡津守彦が「僻地調査のために」(p. 12) 分校を訪れた。岡津によるへき地の子どもたちを対象とした調査が朝日新聞の家庭欄に掲載されたことをきっかけとして、菊地教諭のクラスの子どもたちと読者の小菅満津子(23 歳、東京都立川市在住)との間に文通が始まった。小菅は、「手袋、くつ下、鉛筆、ノート」(p. 12) などを子どもたちに送り、翌年 3 月に分校を直に訪ねた。35 人の子どもたちが通う分校は低学年と高学年の 2 クラスで構成されており、菊地教諭は、高学年(4 年生以上)の 15 人を担当していた。菊地教諭は、担当の子どもたちについて、次のように語っている。



「私は、たった十五名の受け持ちではありますが、それは、長欠児、落第生のたまり場、問題児のたまり場と言っても語弊があるかも知れませんが、とにかく、学力の低下、不衛生、生活態度においてもいろいろと問題があり、どこから手をつけ始めればよいのかと思ったほどでした。(教師として、大同小異、同じ悩みは誰にもある筈ですが。)どこから眺めてもいろいろの問題をはらんでいるのは、私の受け持った学級のようなものでした。」(p.12)

このように語る菊地教諭は、「長い間の好ましくないしつけによって、幼い心にうえつけられ」(p.12)た「しよしい(恥かしい)」(p.13)という思いが子どもたちの学びを妨げていると考え、「文集「山びこ」「くりのみと山びこ」などを出し」(p.13)、子どもたちの表現を育てていた。そして、「現在はH[原文は分校(=部落)名、以下同じ]の生徒も、東京の生徒も、人はみんな同じなのだから、自分たちだってやれば出来るのだ、へこたれないで、何くそ!と思ってやってみよう、というかけ声で、進んでいるのが現状です」(p.13)と述べる。続いて、菊地教諭は、自らもそこに立ち、へき地の子どもたち、人々が生きているこの時代を次のように語っている。

「雑木で覆われた北上山系の一端の谷間に、三十数戸の家屋が点在し、鎖された社会と言われる中で、黙々として炭を焼き、その中で、雑草の如くに育ってきた子供たち……。そして現在、電灯はともし、ラジオは普及し、子供たちは、小菅さんを始め、多くの人たちの暖い愛情に見守られながら、新しいことを体で受け取り、親たちは、世の中の動きを直に身に感じて、鎖された社会から脱皮しようと、新しい村造りに乗り出し始めているのが、このH部落の今の姿です。」(pp.13-14)

この語りから、当時の教師にとって、へき地で教鞭をとることは、自分の被教育体験との間に横たわる文化的なギャップを感じつつも、手つかずのフロンティアを開拓するようなやり甲斐に満ちた体験でもあったように思われる。菊地教諭は、自らの仕事が世間の温かいまなざしによって支えられていることを実感しながら、使命感をもってへき地教育に邁進していた。その文章の掉尾は、次の言葉で締めくくられている。

「僻地の教育は、現在の教育界に、大きくクローズアップされ、声を大にして多く語られ、論ぜられてはいますが、ただそれのみでは、僻地の教育は向上しない。世の多くの人たちの深い理解と愛情、そして惜しまぬ協力の上で、僻地の教育は、力強く前進するのだと思います。」(p.14)

この菊地教諭が勤める分校を単身訪れたのが23歳の朝日新聞読者である小菅満律子であ

った。この東京在住の女性がへき地教育の言説をどのように受けとめて、どのように関わっていったのか、小菅による手記「変らぬ愛情と理解を！——一時的な慰問品や手紙は子供たちを幸福にしない」から辿ってみよう。

菊地教諭の文章にあったように、小菅は朝日新聞の家庭欄に掲載されていたへき地教育調査に関する記事をきっかけとして、H分校の子どもたちと文通をするようになっていた。

「子どもたちの便り、先生の送って下さる生徒の図画や、文集「山びこ」は、まだ訪れぬHの山や川を想像させるのに充分でした。それほど楽しいものだったのです。」(p.14)

へき地の分校からの便りは、東京でおそらく家事手伝いをしていた<sup>8)</sup>小菅にとって、いつしか大きな心の支えになっていた。そして、ついに分校を訪問することを決意する。その決意をもたらしたものを、小菅は次のように語っている。

「私が分校の子供たちに会うため、Hを訪れようと決心したのは、子供たちの便りが、私の日々の生活にうるおいと楽しみを持たせてくれ、それは大人のにごりがちな心に、素朴なもの、新鮮なもの、をしみこませてくれ、その担任の先生からは、現実の教育と、理想の教育とのあまりにもかけ離れた矛盾、それらに対する教師の悩み、等を知らされ辺地の教育に対する関心を持たせられたからです。それは若い情熱を子どもの幸せのために捧げる努力が手紙一面にあふれ、マンネリズムになりがちな私の生活に何時も張りを持たせてくれたのです。かえって私の方が子どもたちから励まされている有様でした。生徒と先生の兄弟のような生活（教育）に心うごかされH訪問を決心したのです。」(p.14)

小菅にとって、へき地の学校で学び合う子どもたちと教師の存在は、日常を乗り越えて、理想に向けて心を馳せることができる対象となっていた。社会学者の見田宗介は「現実」ということばの対義語の変化に戦後の日本人の心性の変化を重ねて、戦後の日本人の心性の時期区分を行っている<sup>9)</sup>。これによると、1945年～1960年が「理想」の時代とされる。小菅が岩手のへき学校を訪ねた1957年は、この「理想」の時代が終焉を迎えつつある時期であった。東京とへき地では、タイムラグがあったため、「マンネリズムになりがちな私の生活」と語る小菅は、「理想」の時代の終焉を生きていた。そのなかで、へき地教育は、社会変革という「理想」を語り合うことで「現実」を「理想」によって書き換えるテーマとして、小菅を惹きつけたのであった。

小菅は、へき地の学校を訪ねたあとの思いを、次のように語っている。

「民主々義国家とか、文化国家とか言われますが、辺地にまで文化が行きわたってこそ始めて文化国家と言えるのだと思います。と共にそこに働く教師は、声を大にして、その生活の安定を叫ぶべきだし、また周囲がその労苦に酬いなければならぬと思います。」(p.16)

小菅は、へき地教育にかかわることを通して、社会変革の大きな物語のなかに自分を位置づけたのである。その一方で、小菅の語りのなかにある、へき地の子どもたちや人々に精神的に支えられながら、へき地の子どもたちや人々を啓蒙しようとするという矛盾は、へき地に生きる民衆に教えられながら、へき地の人々を啓蒙することを生業とした編集者の大牟羅良の矛盾や葛藤とも重なるものでもあった。他方で、二人の若き男性教師たちの語りにおいては、へき地の子どもたちや人々に対する啓蒙の側面がより強く映し出されており、この時点では、へき地の子どもたちや人々から学ぶという側面はあまり映し出されていなかった。

小菅が『岩手の保健』で語ったのは、この一回のみだった。そして、小菅は1950年代後半から1970年代前半にかけての『岩手の保健』誌上において、はじめてへき地教育を語った女性であった。引き続き、1950年代後半のへき地教育言説をさらに検討したい。

1957年12月、『岩手の保健』は創刊50号を迎えた。この号の巻頭を飾るのが「私の僻地での生活は方言の勉強から始った」という26歳の男性教師である吉田守夫教諭の手記であった。これは、県南出身の吉田教諭が県北のへき地の小学校に赴任し、子どもたちにその土地の言葉を学ぶことから出発した教育実践の記録であった。新制大学の学芸学部で学んだ吉田教諭は、まさに戦後新教育の精神をもって、へき地の子どもたちの生活現実から学びながら、生活綴り方の実践によって子どもたちの表現を鍛え、子どもたちや地域の人々に自信を植えつけていった教師であった。このような社会的な実践を支えたものとして、地域の教育懇話会の存在が挙げられている。地域の小学校教諭たちのイニシアチブで結成された教育懇話会にて、さまざまな助言や指導を受けることで、吉田教諭は実践の高まりの手応えを感じていたという。

しかしながら、二校目として赴任した県南のへき地校では、子どもたちとの関係は深まっていったものの、学校新設の場所をめぐって、校区内の二つの部落が対立し、吉田教諭は大変な心労を抱えることとなった。親たちの対立のみならず、子どもたちまで巻き込んだ集団登校拒否騒動もあり、事態はのっぴきならぬものとなった。そして、調停役となったベテラン教諭が、自ら小指を鉋で切断し、和解を訴えたことが社会問題へと派生し、吉田教諭も苦境に立たされることとなった。それでも、吉田教諭は、学校での勤務が終わったあと、夜に部落を訪ねて座談会を開いて、地域の人々の苦情、思いを聴き取るなど、地域の意識を変えるための取り組みを粘り強く行った。その結果、地域の人々の次のような声を引き出すことができたという。

「『先生だち、あまりパツとしたしごとしねえくてもいいから、いい先生だと思われなくてもいいから、先生、いなぐなっても、それがすすくと育つようなもの、そんな一粒の種をまいてもらいたい。ここでは、卒業せば、半分以上は、みんなここにいるのだから…』

『あど、先生だち、あまり変らねえで、いつまでも居でもらいたい。いつまでも、この部落だって、さわいでいるごってはないんだがらー。』」(p.21)

隣の部落同士が反目し合う了見の狭いように見えるへき地でも、そこに生きる人々は、決して何も考えていないわけではない。都市の価値観による教育ではなく、「村を育てる」教育を望み、一時の腰掛けではなく、長期間、子どもの育ちを見守ってほしいと願っている。吉田教諭は、へき地の学校に赴任するなかで、地域の人々の声に耳を澄まして、そこから学びつつ、教師としての自己を育てていったのである。そして、また、この時代は、義務教育卒業後、半数以上の若者が地域に残る時代でもあった。

翌 1958 年 9 月には、「『カキの木』の子供たち—考える親たちの中で・子供は育つ!」という 28 歳の男性教師である伊藤和夫教諭の手記が掲載された。『カキの木』とは、子どもたちの作文のほか、教師の通信や親からの手紙などを掲載した文集であった。新制高校卒業後、中学校に赴任した伊藤教諭は、「労働学校」と呼ばれるような農村の学校で、生徒も、教師も、学校の校舎づくりや家畜の世話をしながら、学校生活を送る経験をしたのち、山村のへき地の小学校に異動することとなった。52 名の 6 年生の担任となった伊藤教諭は、文集『炭やきの子』を編集し、子どもたちの目を通して村の実態を浮き彫りにして、子どもたちや地域の人々の関係性をより風通しの良いものにしようと試みた。次に 3 年生の担任となり、文集『いなかぶ』を編集し、地域の教育懇話会に参加するようになった。3 年目には、5 年生の担任となり、親と子がお互いに思ったことが言えるように、その「共通の広場」(p.12)として文集『山に生きる子供たち』を編集した。

それでも、クラスぐるみで困難な状況にある子どもたちをサポートしようとしても、親の世間体などから修学旅行に行くことを断念した子どもがいたり、伊藤教諭自身が地域の火事の消火の手伝いでケガをして、体調を崩すなど、へき地の小学校での勤めは、容易なものではなかった。このような葛藤を経験しながらも、伊藤教諭は、次のように語って、この教育実践記録を締めくくっている。

「現実の生活はたしかに暗いし、そしてきびしいのだが、そういう中でも親たちの気持ちを变えることができることを信じ努力しなければならない。そしてその気持ちが変わることによってその生活も少しづつ変るにちがいない。そしてまた、その生活が変ることによって、さらに気持ちが変ってゆく、このくりかえしが、一歩々々この K [原文は部落 (=分校)

名]のくらしを高めてゆくにちがいない。この道はたしかにはるかなる道であろう。しかし私は『カキの木』の子どもたち、そしてその親たちと共にこの道を歩んで行きたいと思う。」(p.25)

この時代、へき地教育にかかわっていた若き教師たちの言説には、社会を前進させるという大きなプロジェクトに参加しているという使命感と高揚感が滲み出ている。

この翌年の1959年10月には、「炭焼のくらし一木を追って転々と山を移動する人々」という25歳の男性教師である木下悟(仮名)教諭の手記が掲載されている。木下教諭は、学生時代から『岩手の保健』の編集部を訪ね、編集者と農村の問題を熱心に語り合うなど、へき地の人々の暮らしを向上させることを自らの課題とし、大学卒業後は、自ら望んで、岩手県内のへき地中のへき地といえるような山深い学校に赴任していた。この手記は、そこで子どもたちの暮らしについてのルポルタージュであり、山村の暮らしの過酷さとこれを生み出している社会関係が赤裸々に描かれている。そのため、編集部と本人の判断で、教諭と子どもたちの名前、村名、学校名、すべて仮名での掲載となった。

紙幅の関係で、この手記の詳細な紹介は省くが、この時代、木下教諭のように、へき地の人々の暮らしに深い関心を持ち、自らへき地教育に身を投じた若者たちが存在していたことは、特筆すべきことであろう。そして、地域メディア『岩手の保健』は、このような若者の心を動かす力をもっていた。木下悟教諭は、手記を次のように締めくくっている。

「今まで暗い面ばかり書いてまいりました。しかし決して誇張したつもりはありません。目で見、耳で聞き、体で感じたことをそのまま書いたのです。

この人々の現在の生活は日本の最下層にあるといいきることが出来ます。だから実態に忠実であろうとすれば貧しさを書かなければなりません。この貧しさ、この暗さの中に、何か一つでも希望をつなげるものがあるのでしょうか？。私はこの人々の家を訪ねるたびに、貧しさの中で、いや貧しさの中でも子供たちがすくすくと大きくなっているのを見、“ここにこそ根強いそほくな親たちの愛情があるのだ”と感慨に打たれます。現在の生活が苦しいだけに、かえって子供への期待がつよいのでしょうか。八方ふさがりとも思われる暗い現実の中で、ただ一つのともし灯、ただ一つ望みを托せるものといえば、それは貧しい親たちの、この子供たちへの期待、子供たちに対する根強い愛情ではないでしょうか、山村教師の私も、この親たちの願いを願いと、期待を期待として、めぐまれない親たちと共に歩<sup>ママ</sup>んで参りたいと念じております。」(p.29)

1960年代の前夜、地域メディア『岩手の保健』において、へき地教育は、社会改善に使命感を覚える若き男性教師たちを主な語り手として、日本列島に存在する深刻な貧困の現実

保健雑誌に見られる 1960 年代のへき地教育言説の転換

を学ぶ場所であるとともに、教育の力によって乗り越えうる希望のある場所として語られていた。そして、この語りは、大牟羅良をはじめとする『岩手の保健』の編集部の語りとも大筋で重なっていたのである。

## (二) 1960 年代前半のへき地教育に関する語り

1960 年代に入っても、『岩手の保健』のへき地教育言説の論調に大きな変化は見られなかった。1961 年 1 月号に、「〈ある僻地教師の手記〉京子よ、<sup>つまづ</sup>躓かずに一僻地、H〔原文は部落 (=分校名)、以下同じ〕での生活の中から」というタイトルで再び吉田守夫教諭による手記が掲載されている。吉田教諭は、『岩手の保健』の古くからの読者であり、先に紹介した通り 1957 年にもその手記が掲載されている。1961 年には 29 歳になっていた。

この手記のなかで、吉田教諭は、今は中学を卒業して町で子守をしている京子の小学校時代を振り返りつつ、二校目の H 分校でのへき地教育の実践を描写している。京子の父母は、全国の炭鉱を転々とした底辺労働者であった。貧しさのなかで母を亡くした京子は、姉とともに家事を担っているため、しばしば学校を休まざるを得ない。そのため、理解力はあるのに、学校の勉強に困難を抱えている。修学旅行も行けないところだったが、吉田教諭が役場からの扶助をもらえるように交渉した上で、父親の炭焼き場まで訪ねて、父親を説得した。渋る父親だったが、父親の仕事仲間の口添えもあって、京子は何とか修学旅行に行くことはできた。それでも、卒業式の前々日、謝恩会の練習のために帰宅が遅れたため、父に叱り飛ばされて、二日間、家に入れてもらえないという理不尽な出来事があった。そのため、卒業式には、すり切れて垢のついたズボンで来るしかなかった。吉田教諭は、京子の悲しみを思っ、涙を流し、へき地の学校には、京子のような悲しみを抱える子どもたちが数多くいることを、この手記に記したのである。

手記の最後には、京子を送り出したあとの教育実践が語られている。担当した四年生の子どもたちに「みんなが村長さんだったらどんな村を作りたい」(p.16) と尋ねたところ、誰もが貧しさから脱却できるようなアイデアを次々に示した子どもたちに心を打たれて、次のように文章を締めくくっている。

「私は始めて、四年生ですすでに、素朴な形ではあるが、貧しさをなくし、みんなで楽しく百姓できるような村を作りたいという願いがあるということを知った。こうした子ども達の正しく明か<sup>ママ</sup>るい夢をへしおらずに育てていくよう、僻地 H でのいろいろな教訓を胸に秘め、子どもや親たちから学びつつ実践をなおも深め、高めていきたい—とと思っている。」(p.16)

吉田教諭は、新しい世代の子どもたちに期待をかけて、教師としての決意を新たにしている。部落同士の対立がへき地教育に暗い影を落としていた1957年の文章より明るさが増し加わっている。教育実践の積み重ねを通して村の若者たちの意識が前進していることを、吉田教諭が実感できていることがうかがえる手記であった。

このほか、同年1961年の4月号には、「子等はこう生きていた?!—北上山地の子等の詩を追って—」というタイトルで、33歳の三上信夫社会教育主事が、県北岩泉町のへき地校に通う子どもたちの作文を紹介しながら、その暮らしを伝えた記事が掲載されている。ここで紹介されていた1959年の調査では、長期欠席児童の割合が、小学校で全国平均0.89%であるのに対して、岩泉町は6.14%、中学校では、各々2.25%と20.78%と、大きな開きがあった。長期欠席の理由は、子どもたちの作文にあるように、「おひま」と呼ばれる家の仕事の手伝いのための早退や欠席にあった。山村の貧しい家庭では、子どもたちは貴重な労働力だった。「子供への期待がつよい」（先述の木下教諭）ということの実態は、子どもの労働抜きには生活が成り立たないということだった。

とくに子守りは、子どもの仕事とされていたので、弟や妹を背負って、学校に通う子どももいた。一方で、時代の変化を嘆きつつ、「おらがワラシ（子ども）のときは、もりしながら学校さきたもんだが、いまのワラシはしょっていきたがないで…」(p.9)とつぶやく母親もいた。これに対して、子守りがあまりにも大変なものだから、もう赤ちゃんを産まないでと母親に訴える作文を書いた子どももいた。この作文を母親たちに読み聞かせしたとき、参加した母親は自分に言われたことではないかと「ドキリ」(p.8)としたという。

へき地では、貧困と子だくさんのしわ寄せが、母親と子どもたちの肩にのしかかっていた。それでも、時代の変化、そして地域メディアや学校教育の影響もあり、上記の母親のつぶやきにあらわれているように、へき地の子どもたちの意識も変わりつつあった。まだまだへき地の子どもたちが置かれている生活状況は厳しかったものの、啓蒙的な地域メディアや学校における教育実践とその報告などによって、この厳しさが社会問題として共有されるようになったのが、1960年代前半という時代であったように思われる。

さらに、『岩手の保健』の記事を読み進めることで、このことを検証していきたい。

1962年1月の『岩手の保健』には、「蒼白く活気ない顔」というタイトルで、岩泉町の「年若い」女性教師である高木理和子教諭のレポートが掲載されている。『岩手の保健』ではじめてとなる、へき地の女性教師による手記である。へき地の教師となって2年目の高木教諭のレポートは、実証的なデータが満載で、五つの表も付記されている。岩泉町の乳児死亡率は、全国平均の2倍に上り、岩手県の平均より3割ほど高いことが示されている。次に第1表に「子供の発育状況（県平均との比較）」があり、身長、体重で県平均を下回っていることが示されている。続いて第2表「調味料調べ」、第3表「日常用品調べ」、第4表「住居調べ」があり、中学生を対象としたへき地の暮らしの実情が、農家と製炭農家に分けて、

示されている。平均的な製炭農家では、調味料は味噌、醤油、塩の三種類にとどまり、こしょうを保有している家は半数以下であった。ラジオは、農家 61.3%、製炭農家 57.1% と普及してきているものの、体温計は、農家が 67.6% であるのに対して、製炭農家は 14.2% とかなり少ない割合にとどまっていた。その理由として、「熱のある紅い顔をして来た具合の悪い子に、家に体温計あるかとたずねると『そんなものねえ、下手に計って熱なんか上ると、医者さ行がねえばねくなるが、そんなものねえ方えん<sup>ママ</sup>だっっていってるモ……』」(p. 17) という児童との会話が紹介されている。住居では、畳のある農家が 96.9% であるのに対して、製炭農家では 42.2% にとどまっており、当時の山村の暮らしの厳しさがうかがえる。

最後に、第 5 表には「猷立 (例)」が示されている。お弁当では、製炭農家の子どもは白米を食べ、農家の子どもは稗や麦を食べるという逆転現象が起きてきた。これは製炭農家がすべての領域において貨幣経済に組み込まれていたのに対して、農家は食料において自給自足に近い生活をしてきたためである。当時、岩手県は稲作に適さない地域とされていたため、米を自らの農地で得ることができなかった。また、弁当の中身が質素なものであったため、「年令が長ずれば女の子達ははずかしさから、今度は弁当を持って来ない」(p. 17) というような問題も生じていた。これに対しては、「夜、教師が各部落に出かけては、弁当の必要性を話して歩いた」(p. 17) ことで、弁当をもってくる子が増えてきたという。へき地教育を担っていた教師たちが地域に深く関わっていた様子がうかがえる。家庭での食生活は、毎日、ご飯と味噌汁、漬物位であり、時々、魚や煮付けがつく程度であった。また、ご飯も麦や稗だけの家庭や稗麦 7 割に米 3 割という家庭もあった。

高木教諭のレポートは、へき地の子どもたちの暮らしを県や町の調査や学校でのアンケート調査から客観的、実証的に捉えたものであり、これまでの教師たちの教育実践記録、手記とは位相が異なっていた。このレポートの掉尾は、次のように締めくくられている。

「以上について私なりにみたこと、聞いたこと、感じたことを述べましたが、単なる一部からの甘い分析であって、これを今度どのように改善し、子供たちを恵まれた環境のもとで過させるかにかかっています。で先ず、お弁当を持って来ない生徒をまず持って来させ、食べさせることから始めなければと思っております。どこまで出来るか疑問ですが……。」(p. 18)

へき地の子どもたちが置かれている状況についての詳細な調査に基づく、社会的な分析のあとに、へき地教育についての社会的な提言ではなく、個人的な課題が控えめに記されているところに、いささか落ち着きの悪さを感じる。これは、女性教師が社会的な提言をすることがためられるような時代と地域の風潮の反映なのだろうか。



同じ1962年の3月の『岩手の保健』には、「山奥の人生一年毎に苦しさが募っている」というタイトルで、同じく岩泉町の27歳の男性中学教師である畠山剛教諭のレポートが掲載されている。これは教育実践記録ではなく、純粋に山村での炭焼きを生業とする人々の暮らしを追ったルポルタージュであった。畠山教諭は、このレポートの執筆の動機について、次のように語っている。

「最近調査団やへき地巡回の学生さんたちがたくさんまいります。この人たちに山の生活を本当に知ってもらいたいし、今のような生活が行われている“わけ”も真剣に考えていただきたいと思います。こんなことを考えてこの文章を書いています。といっても、私が山村の人々の生活の本当の<sup>ママ</sup>こどを知っているとは言えません。むしろ、村の人々との接触が多くなればなるほど、わからなくなる、という感じさえします。ただ言えることは、山の学校に勤めて、山の人々と比較的多く付合っているということだけです。」(p.7)

へき地が都市に住む人々にも注目されていたこの時代に、畠山教諭は、炭焼きに従事する人々の暮らしを取材し、彼らのライフヒストリーを辿りながら、木炭価格が下落するとともに、森林伐採のために炭焼場が奥地に奥地に向かうことによって、炭焼きに従事する人々の暮らしが、年を追うごとに苦しくなっているさまを明らかにしている。

へき地の学校に勤める教師たちは、1950年代後半には、子どもたちの表現を通して、新しい教育を創り出そうという使命感に溢れていた。へき地の学校では、子どもと教師との距離が近く、教師も子どもとの一体感を求め、実際に気持ちの通い合いを感じていた。ところが、1960年代に入ると、へき地という存在と教師との間に次第に距離が生じるようになったことが、文章の節々からうかがえる。これは、へき地の未来に対して、容易に希望が持ちづらくなっていたことの反映であるように思われる。

この距離感の変化に伴い、教師によるへき地教育の言説から固有名詞の子どもの姿が消え、へき地という空間が教師たちがそこに生活を営む人々とともに生きる場所から、対象化して観察する場所に変わりつつあった。もちろん、変わったのは、教師たちの意識だけではなく、へき地に生きる人々や子どもたちの生活や意識も、時代の中で変容を免れなかった。「村の人々との接触が多くなればなるほど、わからなくなる」という畠山教諭のことは、へき地がもはや素朴な理想の投影ではあり得なくなったことをいみじくも表現している。

翌1963年12月の『岩手の保健』には、「山の学校を忘れない—先生のともしてくれた灯を守りつづけ、仲間—二十六人—の歩んだ道」というタイトルの19歳の日本大学文学部の学生である高橋信一の手記が掲載されている。こちらの手記は、かつて吉田守夫教諭のクラスで学んだ学生による被教育経験の記録である。高橋少年は、8年前に吉田教諭が勤めた日小学校を卒業した。吉田教諭から教わったのは6年生の1年間のみであったが、その1年間

保健雑誌に見られる 1960 年代のへき地教育言説の転換

の経験が深く心に残っているという。26 名の 5, 6 年生の複式学級であった。

「先生は人に対しては誰にでもそのよさを見え出し、おなじ人間として暖くむかえて下さった。決して先生ぶったり、高ぶったりせず、友だちのように接して下さった。だから先生と向い合っていると、自然に楽しくなり、不安や心配事を持っている者も、自然に心がなごんできて、しっかりしなければならないという気持ちになってくるのだった。先生の態度から生きるよろこびと力を与えられたのだった。」(p.11)

このように、へき地教育に尽力した吉田教諭は、へき地の子どもたちから深い信頼を得ていたという。高橋少年は、吉田教諭の勧めで子どもたちがつけるようになった日記が文集「草ぶえ」に発展したことを伝えている。この記録は、1950 年代後半のへき地教育を被教育体験から映し出した貴重な記録となっている。

ただ、このような懐かしいへき地教育の思い出が掲載されているなかで、岩手の山村、農村は、時代の荒波に晒されようとしていた。東京の大学に進学した高橋少年がそうであったように、若者たちの地域からの都会への流出が顕著になったのである。

同じ号(1963/12)の座談会「農村はどう変った(二)」によると、「[気仙郡]住田町<sup>10</sup>の青少年の都市流出は凄い勢いで、三十八年三月中学卒業生三六〇名中、ムラに残ったものは十七～八名に過ぎない。それに出稼者がふえ、農家の人々は北海道方面へ、大工、左官といった人々は南方へ、家に残っている者も近くの石灰山掘り、缶詰工場などへ、こんなことから人手不足が顕著に現われ出している。」(p.20)と記されている。高度経済成長に伴う山村、農村から都市部への人口移動により、地元に残る若者が激減するなかで、へき地教育は、新たな問題に直面しつつあった。座談会にて、社会教育担当の遠藤重吉は、次のように語っている。

「私たち昨年婦人学級のアンケート調査をやったわけです。『現在一番何に困っているか?』という問いですが、全体の四〇%が健康のこと、次が子供の教育のことで、育児の問題も含めて三五%(中略)やはり今までのように子供を生みっぱなしにするということではなく、子供の教育や健康の面を考えるとということにですね。ということになって来ますと、そこに経済というものがからまってきますね。」(p.22)

つまり、たくさん子どもを産み、幼少期から労働の一端を担わせるという従来の方法では、再生産が不可能になる、すなわち、子どもが成人したときに食べていけなくなるという事態が到来しており、へき地に住む人々は、このことを正確に認識していたのである。泉田豊町長は、遠藤の言葉を引き取って、次のように語っている。

「それァ一理あるな。現在住田町でたくさん子供を生んでいる、特に在郷の人は非常に苦しい。財産があっても手に負えないほど苦しんでいる。これァ実情だ。」(p.22)

町長もまた住民の葛藤を正確に認識していた。これまでのように両親をモデルとして両親と同じような暮らしをすることで世代を継承していくことが困難な時代に差し掛かっていた。遠藤は、町長の言葉を受けて、次のように語っている。

「今までだと農業——つまり第一次産業だけでもどうやら喰えたわけですね。次三男を家においてもどうやら喰えた。それが消費生活が伸びた現況では第一次産業だけでは喰えない。そこで第二次、第三次産業へということになりますと、どうしても教育ということがからまってくる。そういう一連の中で考えなければ……」(p.22)

これまでの言説から検討してきたように、1950年代後半から1960年代のはじめにかけて、へき地の学校に勤める教師たちにとって、教育に関心の薄い親たちを対象としてその啓蒙に努めることが、主な使命であった。ところが、すでに1963年の時点で、岩手県の東南部に位置する山あいの町では、その状況は様変わりしていたのである。産業課に配属されている佐藤博は次のように語っている。

「最近の親たちの学校教育への関心、あの学校の参観日、あれは昔は殆ど行かなかったですがねェ。ところが今は盛んだねェ。親父連中も、婆さんたちも行って来いって出しますね。生んだ子はなんとかしてという気持ち、昔の人とはまるでちがっているような感じですね。」(p.22)

佐藤の語りを受けて、生活改良普及員の松田和子も同意している。

「教育に対する関心はたしかに高まったですね。」(p.22)

皮肉なことであったが、子どもの教育にもっと関心をもってほしいというへき地の学校の教師たちが抱いた願いは、へき地に生きる人々の生活基盤の変化のために、思いもかけない速度で実現したのであった。だが、その関心は、へき地に生きる子どもたちがへき地を担う若者に育つための教育に対する関心ではなかった。

この地域は岩手県東南部のへき地であったため、岩手県全体のなかでは先行した事例であった。ただ、この時期、県内全域で、さらには日本全国で、同じような傾向が広がっていたことが推察されるのである。

(三) 1960 年代後半のへき地教育に関する語り

1965 年 4 月の『岩手の保健』の冒頭に、「将来のこと」というタイトルの陸前高田市の中学 2 年生の女子生徒の作文が紹介されている。

「私の年は十三才  
今は学校に通って  
一生懸命勉強するのが私の仕事  
でも 私だって二年生  
先生が将来のことを言うと とても嫌な気持ちをする  
なぜだろうか 自分でもわからない  
進学 就職——  
私はどちらに進んだらよいものだろう  
就職には 高校を出た方がお金が高いそうだ  
私はどっちに進もうか」(p.5)

女子生徒が通うのは、陸前高田市内とはいえ、山あいのへき地の学校である。しかしながら、この作文からは、作者がへき地の中学生であることはうかがえない。以前の労働を担う子どもたちが、教育を受ける子どもたちが変わっていった。だが、変わった先にあったのは、子どもの願いが叶った喜びではなく、「とても嫌な気持ちがする」という言葉で表現されている新たな極端であった。

同じ号には、「ある出稼青年からの手紙 私は世間を知りたかった」というタイトルで、へき地校で学び、卒業した 24 歳の男性の手記が掲載されている。地元の農業に従事する男性が世の中を知るために出かけた一冬の出稼ぎ先の横浜からのレポートであった。1950 年代にへき地の小学校、中学校で学んだ男性は、農作業が大変ななかで、学校を休ませずに通わせてくれた父母への感謝の思いを綴っている。その向こうには、日露戦争に従軍した際に学問が足りずに苦勞した祖父の思いがあったことが記されている。この男性は、故郷のへき地を離れての思いを、次のように語っている。

「都会に出て思うことは自分の言葉使いの悪いこと、それから人生は死ぬまで勉強しなければならぬものだ、ということ強く感じました。(中略)もう間もなく春が来ますが、四月中旬——農作業が忙しくなる頃まで当地で働き、それから家に帰ります。そして今年の夏は農業に従事、あの辺地の農業を発展させることに励むつもりです。」(p.9)

時代の移り変わりを肌で感じながら、故郷のへき地で新しい時代を生き抜こうとする若者の姿がここにあった。

1968年4月の『岩手の保健』には、「さびれゆく山村生活」というタイトルの28歳の農家の女性の記録が掲載されている。その文章の冒頭は、次のように始まっている。

「思えば十数年前ということになります。その頃は一足一足、社会の進歩に追いつこうと一生けんめいでした。お互いにガッチリとスクラムを組んで…。それが現在はどうでしょう。ランプ生活が電灯に変わり、バスの開通、電話、自家水道、プロパンガス、谷間にかん高くひびくサイレン。十数年前にくらべると、まさに“隔世の感”というところです。」(p.15)

1950年代にへき地教育を受けた世代の回顧録である。

「私たちの村は自給自足でやって来た村でした。それが雑穀メシが白米メシに変わった今日水田の<sup>ママ</sup>少くない私の部落など、ほとんどの家が米を買わなければならなくなりました。売るのは安いし、買うものは高い、それにラジオ、テレビ、ミシン、あらゆる電気器具、脱穀機、耕耘機、オートバイ、チェーンソー（機械ノコギリ）の普及、隣で買ったから買う、品物があるから買う、そしてその代金のために働く、「まるで機械屋のために働いているようなもんだ」と誰もが口にしています。」(p.16)

高度経済成長の生活様式の変化ならびに貨幣経済の農村への浸透は、へき地の人々の暮らしを根こそぎ変えていった。なかでも、深刻だったのは、農村の嫁キキンの問題だった。

「ある母親は「どうにかして家につれこめる嫁っコほしいと思って、山また山とさがし歩いたども、今は山奥ほど就職が多くて、どこに行ってもメラシッコ（小娘）いなかった…」となげいています。とにかく誰もが、働ける働けないはぬきにして“嫁”とよべる人をほしいあせりでいっぱいです。」(p.17)

その結果、農家の主婦はいつまでも過酷な農業の担い手であり続け、この状況を目の当たりにしている農家の若い娘たちは、我先にと故郷を離れて都会に出るのだった。この回顧録には、村の将来が見えないなか、同じ村から三大家族が南米のパラグアイに移住したエピソードも紹介されている。このような厳しい状況の下で、この女性は、へき地の村で読書会を続けていた。

「私たちの読書会、それはもう数年間続いたことになります。そこで出てくる若い人たちの願う村づくりの考え方、それが必ずしも親たちの考え方と一致しません。いやしばしば対立するのです。そんな時、相談にのってくれ、また、仲介の労をとってくれる人があつたら……と思わずにはいられません。それには、なんととっても村のインテリの代表である学校の先生方が望ましいのですが、そのような先生が年毎に少なくなっているのは残念ではありません。」(p.18)

この間、へき地の教師たちの意識が変わってきているというのである。それでは、彼女の記憶にあるかつてのへき地の教師たちはどのようなものであったのか。

「一昔前の先生方は、部落のあらゆる集りにはきつと出て来られて、いろいろと相談に乗ってくれたものでした。」(pp.18-19)

本稿でも、『岩手の保健』にその手記を寄稿した使命感溢れる若き教師たちの語りを紹介してきた。手記のなかには、自らの指を切断してまでも地域の融和を図ろうとしたへき地に生きたベテラン教師の姿までも語られていた。ところが、1960年代後半以降、使命感溢れる若き教師たちの寄稿どころか、そもそもへき地の教師たちからの寄稿が、潮が引いたように途絶えるのである。へき地の教師たちの変化を嘆いた農家の女性の手記が掲載された時期とへき地の教師たちによる『岩手の保健』への寄稿が姿を消した時期はぴったりと重なっていた。一体なぜこのような事態が生じたのだろうか。

この理由を明確に示すことは難しい。ただ言えるのは、電気製品が普及し、人々の多くが車やオートバイを所有し、卒業後の子どもたちのほとんどが地域を離れていくような、1960年代後半の岩手県内のへき地は、教師たちにとって、最早、殊更に高い使命感をもって乗り込んでいくような特別の場所ではなくなっていたということだ。

1960年代後半、『岩手の保健』からはへき地を支える教育言説の発信が途絶え、かつてへき地に新風をもたらした意欲溢れる教師たちの存在も薄れていった。ただ、そのようななかでも、へき地に住む人々は、日々の暮らしを営んでいかななくてはならない。故郷のへき地に残る選択をし、故郷の人々の暮らしをよりよいもの、より人間的なものにしたいという願いをもって生きている農家の女性の悩みは深い。

「子どもの教育についても、どんなに苦しくとも人なみの教育を、と願うのは親心というものでしょう。苦しい生活の中でも進学はふえて来ています。進学する子ども、また、させる親、距離的に通学はムリ、結局親子はなればなれの生活ということになりますが、それでも、現在の自分たち親の生活より幸せにくらすことが出来るならと、進学させているのです。

けれどもその子供たちは学校を卒業して村に帰ってくる者は殆どありません。」(p.19)

時代の変化のなかで、へき地の親たちも子どもたちの進学のための学力を求めるようになり、へき地の教師の仕事も、都会の教師の仕事と変わらないものになった。その結果、本節の冒頭で紹介した中学2年生の女子生徒がいみじくも表現したように、子どもも親も、おそらく教師も、誰もが「とても嫌な気持ち」を抱えながら、そもそもどのような意味があるのかわからない「勉強」に組み込まれるようになったのである。

同じ号には、「“女”でなくなった女」というコラムが掲載されており、そこでは、ある部落において、二～三人の子どもをもっている「若妻会」のメンバー全員が、避妊のための結紮手術を受けていたことが記されている。これもまた、へき地の人々に対する啓蒙の一つの結末であった。この号のあとがきに、大牟羅良は次のように語っている。

「このところ毎日の新聞が、子どもの事故死、出稼から起きた悲劇、交通事故、老人自殺等、暗い記事でおおわれている感じがします。何がこのような悲劇を引き起こしているのでしょうか。読者の皆さんと共にこの世の中が少しでもより幸福になりますよう、今年もその道を求めて参りたいと存じます。」(p.68)

こうして1968年は暮れて、1969年4月の『岩手の保健』では、「ある農村担当保健婦からの訴え 子供のことも考えて！—金とりに忙しい母さんたちへ—」というタイトルの保健婦の手記が掲載されている。この異色の寄稿には、次のような手紙が添えられていた。

「毎日家庭訪問で農家めぐりをしていますが、この頃つくづく農家の子が可哀想になりました。母さんの居ない家がふえているからです。最近殆どの母さんたちは外働きに出、家を留守にしているのです。金にはなるでしょうが、果たしてこれでいいのでしょうか。地区の婦人会長さん、校長さんに話したら大変共鳴され、ぜひ書いて投稿してくれ、とのことでした。それで拙い筆をとった次第です。」(p.6)

1960年代の農村の変化は、そこに住む人々、そこで働く人々の想像を上回る速度で進んでいった。1950年代後半には、子どもたちが学校で必要となるわずかの現金がないこと、すなわち経済資本における貧困が課題であったが、1960年代後半には、子どもたちが成長するために不可欠な親とのかかわりが失われつつあること、すなわち社会関係資本における貧困が課題となっていた。この保健婦は次のように語っている。

「最近の農村の変貌はあまりにもはげしく、私などおよそ想像もできなかったほどの変り

方である。わずかこの十年ほどの間に、テレビは各戸に入り、センタク機、冷蔵庫、プロパンガス、その他の家庭電気器具等、ほとんど都市と差がみられないし、特に農耕用機械が普及し、薬剤は入手をはぶき、農業労働はかなり楽になったようである。(中略)ではそのことによって農家はゆたかになったであろうか。たしかに一見ゆたかになったようにはみえる。しかし外観ほどにはゆたかになってはいないし、次に上げるようなマイナス面も少なくないようである。」(p.6)

そして、農家の暮らしの変貌を物質、精神の両面から綴ったのち、母親の外働きの問題について、次のように語っている。

「特にここ三、四年がほどに、家庭婦人の外働きのふえたことは、アレヨアレヨとおどろくばかりの急増ぶりだった。この急増は、遊んでいてももったいない——ということからではあろうが、そればかりでなく〈家事と育児は片手間にやるものだ…〉という昔からの考え方によるもののように思う。」(p.8)

1950年代後半には、へき地の子どもたちが親たちからの十分なケアを受けることができないのは、経済的な貧しさのために子どもたちにかかわる時間がもてないためであると語られてきた。ところが、この保健婦の手記では、子どもたちが十分なケアを受けることができないのは、経済的な貧しさのためではなく、へき地の人々の「考え方による」ものだと記されているのである。これまで見てきたように、1950年代後半の言説においても、へき地の人々の「ものの考え方」(本稿 p.7/1.11) は問題とされていた。だが、当時の言説には、教育が浸透することによって、へき地の人々や子どもたちがもつたくまじさが輝くような未来が待っているという希望が存在していた。

しかしながら、1960年代後半の地域メディアの教育言説に映し出されているへき地の状況は、1950年代後半にへき地教育、保健の向上に問題意識をもった人々が夢想したものと、大きく異なっていた。高度経済成長によって日本列島に住む人々の暮らしが平準化するなかで、へき地の人々や子どもたちがもつたくまじさの輝きも変質し、従来の啓蒙的な地域メディアを通して語られていた純朴で実直な民衆の声とは異なる位相にある、へき地の人々のリアリティの側面が可視化されるようになった。

この時期、『岩手の保健』を愛読し寄稿するような、社会変革に問題関心をもち、へき地の教育、保健の向上に努めてきた人々と、マスメディアの影響下、時代の変化のなかで新しい生活様式に惹きつけられる一般の人々の意識の間の乖離が明白になりつつあった。先の保健婦の手記は「婦人の外働きのかげにしょんぼりとした子のふえつつある姿、それがことさらにも気にかかるのである。(中略)保健婦である私は、以上のことを、農村地帯のお母さ



んたち、特に外働きのお母さんたちに訴えたいのである。」(p.14) という文章で締めくくられている。

この手記のメッセージは、果たして、外働きに出かけている母親たちに届き、快く受け入れられたであろうか。外働きに出かけている母親たちもまた、激しい時代の変化のなかで、生活の向上を望み、懸命に生きていた。だが、その母親たちの努力は、地域の保健婦、「婦人会長」、「校長」からは、子育ての責任からの逃避と見なされていた。

それでは、外働きに出かけていた母親たちは、この時期、どのようなメディアに接していたのだろうか。母親たちが働きに出かけた町には、テレビや女性週刊誌<sup>11)</sup>をはじめ、新しいメディアが続々と登場していた。現金収入を得た彼女たちは、美容院や飲食店にも出かけただろうし、そうした場所でさまざまな新しいメディアと出会ったことだろう。それらの影響力は、『岩手の保健』を圧倒したのではないか。時代のうねりのなかで、戦後のへき地の貧しさや生活の困難に向き合い、地域の声を拾い上げてきた地域メディア『岩手の保健』も、また大きな転機を迎えていた。

そのようななかで、むしろ故郷のへき地を離れて、都会に働きに出た人々のなかから、へき地教育を懐かしむ手記が投稿されるようになった。同じ号の「ある集団就職者の手記 追われ過ぎた六ヶ年(その2)」というタイトルの手記は、岩手県北のへき地で生まれ育ち、中学校卒業後、東京に集団就職した青年のライフストーリーである。青年は自分の生まれ育ちを次のように語っている。

「私は岩手の一寒村(少なくとも私が生まれ育った頃はそうだった)に生まれました。私は中学を卒業するまで、自分が生れた村から一歩も外に出ることなく、その日々を無知のうちに過ごしていました。私は村外に出たのは、私が中学を卒業して上京する一週間ほど前に、母親から貰った五百円の金をふところにして県都盛岡に遊びに出た。それが最初だったので。」(p.51)

青年は、決して心に残る献身的な教師と出会ったわけでもなかったし、特別なへき地教育を受けたわけでもなかった。しかしながら、東京に出て、幾度もの転職を経験し、定時制高校で苦学するなかで、社会について深く考えるようになっていた。そのため、帰郷の折に、変貌した故郷を目の当たりにしながら、次のような思いを語るのであった。

「どこの家でもセンタク機を買い、テレビを買い、流行を追う金があるのなら、村の青年、子供たちのために、村営の図書館でも作ればいいのと思いました。」(p.49)

青年は、中卒の集団就職がもてはやされた時代の身寄りのない東京での厳しい労働と生活

保健雑誌に見られる 1960 年代のへき地教育言説の転換

の現実と、以前からは見る影もないほどに変貌した故郷の姿の、どちらの状況も肯定できないなかで、かつての故郷の風景を懐かしく回想する。

「私は前に、無知のまま育ち、無知のまま上京したことを書きました。しかし私は今、私のその子ども時代を後悔しているのではありません。むしろなつかしくさえ思い出すのです。たしかに何も無い時代でした。けれども一歩外に出ればみどりの自然がありせせと働いている蟻の群れ、新鮮な若芽の息吹きがありました。それは東京にはないのです。東京の子どもの生活、それは、朝早く大きなカバンに重い道具を背負っての登校姿、学校から帰るとすぐ道具をとりかえて塾へと、それも青白い顔して口先だけは達者。それが私の子どもの時代に比べてより幸福だとは思えぬのです。その都会の子どもの姿をみると、私は何か残酷無惨なものすら感ぜずにはられません。」(p. 52)

『岩手の保健』におけるへき地教育言説の語り手は、1950年代後半のへき地学校の若き教師たち、編集部、東京に住む市民から1960年代後半にはへき地から都会に出た青年たちに変わっていった。いずれの場合も、へき地教育の貧しさと豊かさが語られる舞台となったのは、1950年代後半から1960年代前半のへき地の姿であった。この時代のへき地は、教育の可能性を最大限に夢見ることができるフロンティアであった。へき地の子どもを通して、大人たちの誰もが未来の希望を語り合えた時代、それが1950年代後半から1960年代前半という時代であったといえるのではないだろうか。

#### (四) 1970年代前半のへき地教育に関する語り

さて、大牟羅良は、1958年に『ものいわぬ農民』を刊行したあと、1960年代を通して『岩手の保健』の編集にかかわり、農民たちの声を拾い、へき地に生きる人々が自らの生活を見つめ直すとともに、これを読む読者たちが自らの経験を重ねつつ、へき地の生活への関心を高めることによって、内外からへき地に生きる人々の意識を覚醒させ、人々の生活の質の向上を目指すことに尽力してきた。

ところが、大牟羅良のこのような奮闘は、高度経済成長に伴うへき地の変容によって、意外な結末を迎えることとなる。『ものいわぬ農民』の刊行から13年後、同じく岩波新書として刊行された大牟羅良が同じく『岩手の保健』の編集者である菊地武雄との共著で執筆した『荒廃する農村と医療』(岩波新書、1971)に掲載された子どもたちの生活綴り方の作文には、様変わりしたへき地の様子が映し出されている。

「(今家に)残っているおかあさん、にいさん、わたしの三人は、四人のときより、話をし

なくなり、心ぼそい日がつづきます。

わたしとにさんが学校へ出かけたあと、おかあさんはたったひとりで、わたしたちが帰るまでいなければならぬので、いつもラジオをガンガン遠くまで聞こえるようにかけています。ときどき、ラジオをかけっぱなしで、コタツでいねむりしているときもあります。

わたしが帰ると、いつものように「ひとりでいりゃ、家に、いたぐなぐなる」といいます。」(pp. 39-40)

こちらもまた6年生女子児童の作文である。前著『ものいわぬ農民』で描写された高度経済成長の入り口に差しかかるころでの農村の貧しさは、誰にもわかりやすい経済的な貧しさであった。これに対して、後者の高度経済成長の出口における農村の貧しさは、家族がバラバラとなる人間関係の貧しさとして描かれている。前者の作文には、ろばたでだまっとうつむく父親がいた。しかしながら、後者の作文には、父親の姿が存在しない。父親は、家族と離れて都会に出稼ぎに出かけている。そして、父親の代わりに、テレビ（この作文ではラジオ）という電気製品が存在感を増している。農村にもテレビが普及しつつあったこの時代に、まだラジオが健在だったところに、この家族が経済面でもまだ貧しさのなかにあったことが写し出されている。

『荒廃する農村と医療』において大牟羅良が描写する農村社会は、オートバイ、自動車、テレビといった工業製品に覆われたものに変っていた。事実、農村における自動車保有率は、都市部よりも高かった。しかしながら、この数字は、決して農村での生活がほんとうに豊かになったことを表しているわけではなかった。

多くの働き手、若者が都市に出て、出稼ぎをしたり、あるいは集団就職をすることによって、現金収入が生じ、農村に見かけ上の経済的な豊かさが生じていたものの、その裏側には、人間関係の貧しさの進行という大きな代償が伴っていた。岩手の山村、農村では、地域によっては、ほとんどの若者が村を出ることで、残された少数の若者が孤立し、悩んでいるところもあった。大牟羅は、そのような若者たちの声を拾いながら、暗い藁葺きの家のなかで家族がいろりを囲んでいた時代から、果たしてへき地は豊かになったといえるのかと、深く沈思している。

その結果、1958年の時点では、とにかく克服すべきものとされていた農村の貧しさと家族ぐるみでの重労働が、1971年になると、むしろ濃密な人間関係を伴う豊かな暮らしとして振り返られるようになる。先の集団就職した青年の手記と重なる内容である。

『荒廃する農村と医療』が刊行された1970年代前半、『岩手の保健』では、へき地教育はどのように語られていたのであろうか。1972年2月の『岩手の保健』の巻頭には、「でかせぎの父とうちの父」という小学校5年生の女子児童の作文が掲載されている。

「うちの父は働き者だ  
いつもあせびっしょり  
すこしいたわってやろう  
でかせぎにいく父をみると  
家がさびしくなる  
千葉でなにしてるかな  
父はどうしているかな  
またあせびっしょりなっているかな  
夜 ねむったかな  
父のいない家に「おやすみなさい」  
うちの父がいい」

出稼ぎに行っている父親のことを思い遣っている作文である。1972 年 5 月の『岩手の保健』も巻頭に子どもの作文が掲載されている。「出かせぎなんかやめてしまえ」というタイトルの 4 年生女子児童の作文である。

「とうさん どうして  
でかせぎなんかしなければならぬの  
冬ぐらい家の中にいてほしいのに  
出かせぎしないとくらせぬの  
お金をつくるために  
働いているんでしょ  
わたしはさびしい  
出かせぎなんかなくてもいい  
お金なんかなくてもいい  
家にいてほしい  
とうさん 早く帰ってきて」

1970 年代に入り、『岩手の保健』では、へき地教育が語られることはほとんどなくなっていった。ただ、「出稼ぎ」については、へき地の子どもたち、人々の生活に深刻な影響を与えている問題として、語られ続けた。同じ号では、「うちにてほしい母ちゃん」というタイトルの男子児童の作文も掲載されている。「出稼ぎ」をしているのは、父親ばかりではなかったのだ。子どもたちが作文のなかで、父や母のいないさびしさを語る一方で、へき地に生きる大人たちの思いは、さまざまだった。同じ号に、「夫を出稼ぎにやりたい」というタイ

トルの二児の母親の思いが綴られている。

「私は、毎日私の周囲の家や人々を見る度に肝がやけてしまう。私の住んでいる町からは沢山の出かせぎ人が、東京、北海道に出ていって沢山のお金を稼いで送<sup>ママ</sup>っている。何年間か前までは、洗濯石ケン一つ買うのも大へんだと話合っていた人達が何年もたたぬ間に、みるみる立派な家に住み、何処の家にも同じような家具をどんどん買入れて、カラーテレビもつけるようになった。私の近所などでは、自動車を買って、自動車を出かせぎに行く人さえ出ているありさまだ。

こんな周囲の中で、私の夫は製粉所につとめて、細ほそと三万円足らずの給料で働いている。親子四人の生活はどん底以上に苦しい。私も一時は働きに出ていたが、時折体の具合が思わしくなく、働いては医者にかかって大へんなお金をとられるよりは、家のことをしながら病氣しないようにしていた方がいいと思い、働くのをやめて、その代り前にもまして一生懸命に家のことをしている。だが一時のようにきりつめてばかりいても、もはやどうにもならない時にきている。私が夫に出かせぎを進めると、夫はきまって

「夫婦というものは一つ屋根の下にいるものだ」と言う。

でも周囲があんなによくなっていくのに、と言うと、

「俺は出かせぎには生涯いかない。見ろ、新聞には毎日のように労働上の事故で死んでいる者がたえないではないか。」

「でも皆が死ぬわけではないから……」

と言えは

「俺のように行きたくなくていくやつは、きまって死ぬんだ。今の仕事が俺には丁度いい」と言って聞き入れてくれない、でも私はあきらめたくない。何んとかして繋りがあったら出してやりたいと思う。もう夫婦はなれていてもさみしい等と言ってはいられないところに来ている。

どしどしあたりが向上していくのに、私たちだけが取残されていくのは考えものだ。私がいくら説いてもきき入れない夫を、誰か出かせぎするように気持を向けてくれる人がいないものだろうか。

一日でも早く夫がその気になるのを待ちわびている。」(p.20)

へき地に生きる家族の声も、もはや一つに括ることが難しい時代を迎えていた。父親と一緒に住みたいという子どもの声も尊重すべきものである一方で、消費社会化が進むなかで、今の夫の収入では人並みの生活が営めないという母親の声も一理あるものであった。さらに、出稼ぎ労働は生命の危険を伴うという父親の声もしかりである。運命共同体として、家族の全員がへき地の貧困という宿命を、受けざるをえなかった時代から、経済面での貧困か、関

保健雑誌に見られる 1960 年代のへき地教育言説の転換

係面での貧困か、どちらかを選べる時代に、移行したのであった。

なまじ選べるものであるから、かつて以上に、子どもたちや母親には、今の生活に対する不満が残った。ただ、残念ながら、へき地の民衆の多くにとっては、経済資本における豊かさと社会関係資本における豊かさをともに選ぶという選択肢は存在しなかった。その上、どちらを選ぶのが、家庭の選択あるいは個人の選択とされたことで、生活、そして教育も、私事として語られるようになり、へき地の貧困という宿痾と対峙して、さまざまな立場にある人々が連帯して立ち向かうことによって生み出された、公共性の構築につながりうる、へき地教育言説も失われていった。

さて、大牟羅良は、『荒廃する農村と医療』のなかで、「出稼ぎ」による村の人々の流出を、女性たちが“大東亜戦争”の再来として表現していたことを紹介している。

「農家の婦人（四一歳）から手紙がありました。「このごろ近所の主婦たちが集まると“また大東亜戦争が来たような気がするじゃねえ”という話がよく出ます」とまえおきして、自分の夫は出かせぎ、長女、長男は中学を出るとすぐ東京方面に集団就職、家にいるのは八〇歳過ぎの爺さんに、また年齒<sup>ママ</sup>もゆかぬ子ども二人、本当に大東亜戦争当時とおなじだ、と書いてありました。」(pp. 13-14)

戦争と高度経済成長の重なりは、これ以外にも存在した。戦争が当初一時的な好景気をもたらしたのと同じように、出稼ぎが始まるとその当初、農家に経済的な豊かさをもたらしたのだった。大牟羅は、次のように語っている。

「しかし、そんな〔戦争の時代と重ねて見えた〕私の心配をよそに、出かせぎも集団就職も逐年ふえていく、同時に農家のたたずまいも、家々のくらしも次第に変貌をとげていきました。しかしその変貌は、少なくとも当初のころは、一見して好ましいものに思えてなりませんでした。」(p. 16)

ところが、好ましいものに思えた変化は長続きはしなかった。1971年にへき地の部落を再訪した大牟羅が目の当たりにしたのは、以前とは様変わりした、閑散としたへき地の風景だった。

「部落についたのは夕刻近いころでした。まだ周囲の山々は白雪に覆われてはいましたが、さすがに春めいていました。部落の夕刻、それは子どもたちの声でにぎわっていたのですが、子どもたちの姿が殆どみえず、ひっそりと静まりかえって、家々から立ち上がる夕餉の煙、部落をめぐる山々から立ち上がっていた炭焼く煙もそこにはありませんでした。かつて

はコトコトとまわっていた水車も動かぬままになって既に何年を経たのでしょうか、こわれかけた姿をさらしていました。」(p.26)

大牟羅は、顔なじみの農家に宿泊した。そこで聴いた村の現状は惨憺たるものであった。小学校は廃校になり、中学卒業生で村に残る者は一人もいない。部落の総世帯数は35戸まで減り、人々のつながりも薄くなっていた。このような村の暮らしでは、娯楽もないものだから、出稼ぎに楽しみを見出す人々もいた。ここにも、戦時中と重なるものがあると、大牟羅は語っている。

「戦時中は「戦争のおかげで、百姓していてア一生見られねえ外国まで、官費旅行さしてもらったからなァ……」という親父さんたちのように、外国までとはゆかなくとも“出かせぎのおかげで”農業だけしていたのでは到底みられぬ全国各地をみられるようになったのかも知れません。」(p.34)

1970年代前半、もはやへき地問題は、へき地教育そのものによって解決する問題ではなくなっていた。出稼ぎの増加、若者の都会への大量流出というのは、社会構造の問題であった。まさに、戦争に巻き込まれるように、へき地に住む人々は、高度経済成長に翻弄されることとなった。そして、『岩手の保健』においても、へき地教育言説が何よりもまずへき地教育にかかわる人々を勇気づけ、奮い立たせるようなものとして機能する時代が過去のものとなってしまったのである。

1950年代後半から1960年代前半にかけて、へき地教育言説は、さまざまな立場にある人々が教育を公共的な営みとして立ち上げるための貴重なプラットフォームとして機能していたといえる。もちろん、これはさまざまなプラットフォームのうちのほんの一つであったかもしれないが、へき地教育言説のような教育の公共性を地域の現実に即して多様な立場に立つ人々が語り合えるプラットフォームが失われていったことは、公教育における公共性の衰退を進めることにつながるものであった。事実、1970年代以降になると、さまざまなメディアにおいて語られる教育言説は、私事化、個別化の色彩を強め、こうして創り上げられていった土壌の下で、公教育の公共性は見失われ、容易く「新自由主義」に絡めとられていくことになった<sup>12)</sup>。

教育を公共的な営みとして語り合うことのできるプラットフォームをどのようなかたちで創出しうるのか、『岩手の保健』におけるへき地教育言説の変容の歴史は、私たちにこうした問題を考えるための手がかりを与えてくれているように思われる。

## (五) おわりに

1950 年代後半、『岩手の保健』が読者の声として拾い上げながら、発信していたへき地教育言説は、現実のへき地における教育の困難さを直視しながらも、教育の理想を語り、やがて来る<sup>きた</sup>未来への希望に満ちたものであった。奇しくも、ちょうどその時期に、『岩手の保健』の発行部数は、その絶頂期を迎えている。

1960 年代前半に入っても、へき地教育言説は、ある一定数存在していた。ただし、この時期になると、教師のへき地教育の語りにおいて、教師と子どもたちとの距離の近さをへき地教育のもつ教育の理想とする言説は影を潜め、へき地の子どもたちの現状を客観的に捉えた分析的な言説が広がっている。

そして、1960 年代後半に入ると、へき地教育言説は、大きく様変わりする。そもそも教師によるへき地教育の語りが誌面から霧消し、リアルタイムでのへき地教育そのものが語られなくなる一方で、へき地の人々の生活と意識に大きな変貌をもたらした、出稼ぎの増加や青少年の都会への大量流出といった社会的な問題が言説の主要な位置を占めるようになった。さらには、社会変動のなかで、『岩手の保健』が想定してきたへき地の人々の生活と意識が現実のそれらと乖離するようになり、へき地教育言説も大きな転換点を迎えたのである。

1970 年代前半になると、『岩手の保健』の舵取りを担ってきた大牟羅良の葛藤の深まりが色濃くなっている。へき地に住む人々の間、さらにいうと、へき地の家族の構成員の間でも、考え方の違いが大きくなり、最早これらを一括して、へき地に生きる人々の声として語ることが難しくなったのである。これは、社会変動に伴い、へき地に生きる人々の生活様式が都市の人々のものと近づいたことにより、ある種のオリエンタリズム的な描写が困難になったためであった。

へき地がそのへき地性、つまり異文化性を失ったとき、地域メディアのなかからへき地教育言説もまた潮を引くように失われていった。かつて、へき地教育言説というプラットフォームは、さまざまな立場にある人たちが、へき地教育の課題とともに未来の社会への希望を語る場として機能した。しかしながら、社会変動に伴ってへき地の親たちの教育への関心が高まることで、皮肉にも、へき地の学校もまた、誰もが不満を抱えながら、自らの声を押し殺しつつ、都会の子どもたちと同じ無機質な「勉強」を強いられる場となっていった。

そして、へき地教育言説が現在進行形として語られなくなった時期に差しかかった時、へき地教育はかつて存在していた理想の教育として語られるようになった。語りの主体となったのは、かつてへき地の教育を受けて、都会に出た若者たちであった。リアルタイムには克服すべきものとして語られたへき地教育が、過密が進む都会の子どもたちの生活と教育の質が問われる一方で、へき地の学校にも都会の学校と同じような無機質で標準化した「勉強」



の文化が広がったときに、かつて存在した理想の教育として表象されることになったのである。

本稿で、ここまで検討してきたように、『岩手の保健』におけるへき地教育言説の変容は、1970年代に入って、教育政策において、へき地教育が後景化するようになったこと、そして、教育言説において、かつてのへき地教育が理想化されるようになったことの一つの歴史的社会的な文脈を映し出している。

『岩手の保健』における1950年代後半から1960年代中頃にかけてのへき地教育言説は、オリエンタリズム的な側面を持ちつつも、さまざまな立場にある人々が、公共的な営みとしての教育のあり方について語り合う場を準備していた。1960年代前半は、教育の公共性が広く共有されていた時代であったが、そのバックグラウンドには、『岩手の保健』のような教育に関する議論の場を保障していた地域メディアの存在があった。

しかしながら、1960年代後半から、社会変動に伴い、へき地の教育と生活が都市部のものに限りなく近づくなかで、『岩手の保健』におけるへき地教育言説は姿を消し、誌面から教育について語り合う場も失われていった。

新自由主義にどっぷり浸かった2020年代、一人ひとりの異なる声に耳を澄ましなが、私事にとどまらずに、社会と地域の未来を創る公共的な営みとして教育について語り合う場を、どのようにして準備していくのか。1960年代を中心とする『岩手の保健』、そして大牟羅良の挑戦と挫折から私たちが学ぶべきことは、数多く存在しているように思われる。

#### 注

- 1) 本稿では、「へき地教育」という用語を、山間部等、都市部から離れた学校、分校における教育を指す、一般的な用語として用いている。そのため、本稿で取り上げる「へき地教育」や「へき地学校」は、「へき地教育振興法」及び「へき地教育振興法施行規則」に基づいて各都道府県が条例によって定めている「へき地学校」とは必ずしも重なるものではない。
- 2) 岩田一正「新聞と教育委員会機関誌に見る一九六〇年代におけるへき地教育言説の動態」(2023)によると、1960年代後半のへき地教育言説の一例として、朝日新聞1968年6月18日朝刊の特集「教育過疎・過密のひずみ」において、当時の著名な教育関係者たちによって「へき地学校は教育環境として過密地域の大規模校よりも恵まれていると表象されている」(p.15)ことが示されている。
- 3) 若狭蔵之助の教師としての歩みについては、高井良健一・坂本明美「若狭蔵之助のライフヒストリー」(久富善之編著『教員文化の日本の特性』多賀出版、2003、pp.345-394)、若狭蔵之助『フレネへの道生活に向かって学校を開く』(青木書店、1994)に詳しい。
- 4) 1970年代、若狭蔵之助は、『労働者農民の歴史学習』(明治図書、1971)、『小学校高学年の社会科教室』(明治図書、1971)、『民衆像に学ぶ』(地歴社、1973)、『生活のある学校』(中公新書、1977)など、教育実践に関連する多数の著書を世に問い、「公園をつくらせたせっちゃんのおばさんたち」(日本教職員組合教育研究集会、1970)、「私たちの大泉学園町」(日本教職員

組合教育研究集会, 1975) などの教育実践の報告を行っている。

- 5) 『岩手の保健』の発行部数について、復刻版の刊行にも尽力した北河賢三は、「『岩手の保健』五五号（一九五九年七月）は、発行部数三五〇〇、購読数二六〇〇と伝えており、この頃がピークだったようである」と記している。（北河賢三「大牟羅良一農村の変貌と岩手の農民―」p.181（苅谷剛彦編『ひとびとの精神史 第4巻 東京オリンピック1960年代』（岩波書店, 2015）所収）
- 6) 北河同上論文, p.176。
- 7) 1956年度の学校基本調査によると、岩手県内の小学校は785校となっており、編集部の数字は、中学校と合算したものであった可能性がある。また、2022年度の学校基本調査によると、岩手県内の小学校は289校、そのうちのへき地校が53校であり、いずれにせよ、高度経済成長以降、学校の統廃合が大規模に進められてきたことがうかがえる。なお、2022年度の時点では、へき地校の数は、北海道が334校で最も多く、次に鹿児島県の203校、沖縄県84校、長崎県80校、新潟県64校、高知県63校、島根県59校と続き、53校の岩手は8番目となっている。
- 8) 小菅は、「旅費をどこから捻出するかと言うことが大変でした。お勤めをもたない私にそのお金が、あろうはずがなく、幸いにも洋裁、編物を少しばかり習い覚えておりましたので、そこから作り出すことにきめました。」(p.14)と記している。
- 9) 見田宗介, 1995, 『現代日本の感覚と思想』講談社学術文庫, 10-36頁。
- 10) 岩手県東南部に位置する山あいの町。
- 11) 主要な女性週刊誌の創刊年は、『週刊女性』1957年、『女性自身』1958年、『女性セブン』1963年であり、1960年代半ばには主要3誌が出揃っている。
- 12) 高井良健一「1960年代の経済誌における教育言説についての考察」（2022）には、経済誌における教育言説が私事化、個別化するまでの前史が叙述されている。

#### 参 考 文 献

- 岩田一正, 2023, 「新聞と教育委員会機関誌に見る一九六〇年代におけるへき地教育言説の動態」, 『成城文藝』261号, pp.1-26。
- 北河賢三, 2002, 「大牟羅良と『岩手の保健』」, 赤澤史朗ほか編『年報 日本現代史 第8号 戦後日本の民衆意識と知識人』現代史料出版, pp.37-67。
- 北河賢三, 2015, 「大牟羅良一農村の変貌と岩手の農民―」, 苅谷剛彦編『ひとびとの精神史 第4巻 東京オリンピック1960年代』岩波書店, pp.173-196。
- 見田宗介, 1995, 『現代日本の感覚と思想』講談社学術文庫。
- 無着成恭編, 1951, 『山びこ学校』青銅社。
- 大牟羅良, 1958, 『ものいわぬ農民』岩波新書。
- 大牟羅良編, 1962, 『野良着の声―アンケート―』未来社。
- 大牟羅良, 1962, 『北上山系に生存す―声なき地帯の声―』未来社。
- 大牟羅良, 1971, 『荒廃する農村と医療』岩波新書。
- 鈴木正気, 1978, 『川口港から外港へ―小学校社会科教育の創造―』草土文化。
- 高井良健一・坂本明美, 2003, 「若狭蔵之助のライフヒストリー」, 久富善之編著『教員文化の日本

的特性』多賀出版, pp. 345-394。

高井良健一, 2022, 「1960年代の経済誌における教育言説についての考察」『東京経済大学人文自然科学論集』第152号, pp. 115-129。

東井義雄, 1957, 『村を育てる学力』明治図書。

若狭蔵之助, 1977, 『生活のある学校—遊び・手仕事・子どもたち—』中公新書。

若狭蔵之助, 1994, 『生活に向かって学校を開く—フレネへの道—』青木書店。

\* 本研究は、科学研究費助成基盤研究（C）課題番号 20K02439 「マスメディアの言説にもとづいた1960年代の教育像の研究（令和2年度～5年度，研究代表者 佐藤知条）の助成を受けた。